

真空・薄膜 徒然草

金原 粲 著

(発行 アグネ技術センター (2013年3月) A5判, 192ページ (本体価格 2,400円+税))

面白い！ いつの間にか引き込まれ、気付くと最後のページになっていた。『年を取り、研究というものから遠ざかって、初めて自分の過去を振り返ってみた。一貫した研究というものをしたのかといわれると、説明に困るが、少なくとも呑気に、競争など気かけず、薄膜という名のご馳走を真空という名の食器を使ってつまみ食いをしてきたことは確かである』という書き出しで始まる本書は、著者とともに真空・薄膜物理の歴史を旅する中で、1700年代の科学技術にまで遡り、研究、そして研究者のあるべき姿を見つめ直す機会を与えてくれる逸品である。薄膜の作製法や評価法の話には、ニュートン、フック、ヤング、マックスウェル、ファラデーなどよく知られた名前が現れる。そうした中、『“はじめて” 本当に何かを成し遂げた人、それを助けた人にはそれ相当の敬意を払うべきだ』と信じ、『お仕着せの“正しい歴史認識”ではなく、自分で調べた結果に基づく認識を持つ訓練をつむことの大切さ』を説く著者が、当たり前のこととされてきた仕事の原典に目を通し、それぞれの研究の成り立ちを追うくだりは、本書全体を通じて流れる、科学に対する姿勢である。

『始末に負えない面白いやつ』、『清？貧 昔の実験』、『言いにくいことだが』、『UFO 薄膜？』、『ホップ・ステップ・ジャンプ』、『宇宙人？出現』、章のタイトルを見るだけでワクワクする。著者の作であれば、きっと楽しい本に違いない。そう思って引き受けた書評であったが、楽しみながら読むうちに、つい忘れがちになる、夢を見始めた頃の気持ちを思い出すとともに、遠く連なる科学の世界を広く見渡す気分になれた。

是非、一読されることを勧めたい一冊である。久しぶりに良い本に巡り会えた、という思いで本を閉じた。

(重川秀美)